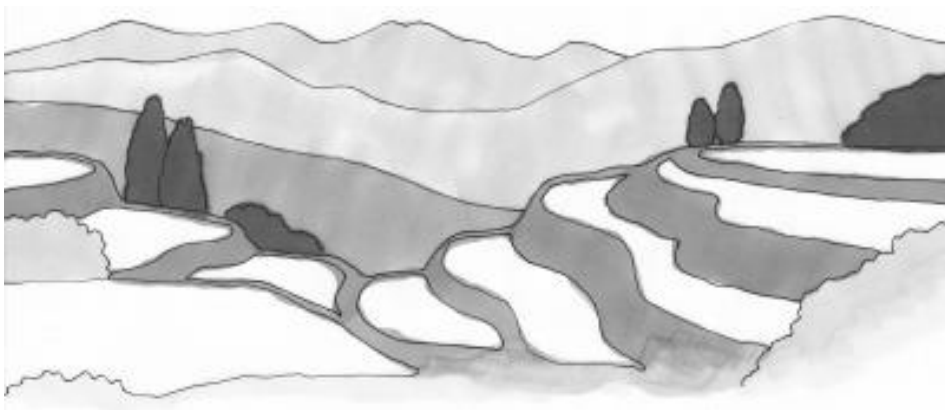


吉野川流域の未来

吉野川の源流域である四国山地の中央に位置する高知県嶺北地域は林業と農業が盛んで、棚田米や色合いのきれいな杉材を産しています。私は十数年来、源流の森や棚田を訪れ、農業や林業に携わる生産者と下流の人たちとの交流を深めてきました。ある年、農家さんの案内で棚田を潤す水源に行ったことがあります。そこで、谷を流れる清冽な水の豊かさに目を見張りました。棚田からぐるりと見渡す緑の回廊の、無数の谷から流れ出た水が田畑や水路を経て吉野川本流に注ぎ込み、大河を形成する、そのダイナミックな水循環を実感したのです。吉野川流域の面積は 3750 平方キロメートル、四国の面積の実に20%を占めます。以来、「流域」という視点で、私たちの暮らしや文化・歴史を捉えるようになりました。



歴史をさかのぼってみると、日本は水系を単位としてまとめ、人の交流や物流が発達してきました。人口 3 千万人の江戸時代は見事な流域圏を形成していたそうです。吉野川も同様に、上流域で伐採された木材を筏に組んで流送したり、中流域で産した藍や下流域で産した塩などを載せた平田船が行き来する重要な船の水路となり、自然と共生しながら経済が循環する流域圏を成立させていました。近代、特に戦後、人口の急激な増加により平地の都市化が進み、洪水を防いだり水を利用するという目的を重視するあまり、川の連続性や健全な水の循環が阻害され生態系が劣化してしまいました。森の再生は進まず、第 1 次産業の衰退で中山間地の森や田畑から人が去り、流域を循環する経済も滞っています。

そのような時代を経て今、吉野川流域では上流と下流、まちと森をつなぐいくつものネットワークが生まれ、流域の再生と未来を模索しています。この吉野川ラムサールネットワークもその一つです。流域のさまざまなフィールドで活動する人たちとついに、吉野川河口域をラムサール登録することで流域全体の価値を守り高めていくことをめざしたいと思います。この活動の輪が広がっていくことを願っています。

近藤こよ美（NPO 法人里山の風景をつくる会 代表）

☆イラスト出典：NPO 法人里山を作る会 HP

『まちと森をつなぐー里山の風景をつくる会 15 年展』(2015/5/15~17)の案内より転写